

曇鸞の『浄土論』解釈の視点

——「第十八願開頭の書」としての『浄土論』の一考察——

同朋大学 尾畑文正

一

世親の『浄土論』の中心課題はその解義分を通してみてみるならば、往生浄土の行としての五念門行を修して無上菩提を速やかに獲得するところにある。従って、その速得菩提の課題、それこそが自利利他円満を課題にする大乘菩薩道の成就である。その大乘菩薩道が究竟されていく世界を「願生偈」として、つまり、願生浄土の仏道としてあらわしたところに『浄土論』の仏教思想史の中の独特な立場がある。

しかし、このような課題を表現する『浄土論』も、曇鸞がその註釈書である『浄土論註』を製作しない限りは、『浄土論』が説くところの真実の意義も明らかにされなかつたに違いない。なぜなら、世親の『浄土論』はすでに、「そこに展開せられる行道体系は、それを注意したように、世親当時の大乘仏教としての瑜伽唯識仏教の行道のそれであった」（山口益著『世親の浄土論』）と識者によって指摘されているように、その思想的背景は瑜伽唯識思想である。

その意味では、『浄土論』に説かれる浄土は、もちろん、阿弥陀如来の仏国土ではあるが、その浄土の本質は唯識三性説でいわれるところの円成実性（真实性）としての国土として理解されることとなる。その限り、浄土に往生することの内実は思想的には瑜伽行においてなされる転識得智として獲得される世界である。それほどまでも瑜伽行という宗教的实践において成立するものである。

その限り、世親の『浄土論』は確かに「無量寿経」を優婆提舎する論として浄土教仏教の仏道大系を大乘仏教の上で初めて組織的に記述したものではあつても、そこに現された仏道はどうしても瑜伽行を主体的に実践することのできる能力のある特定な丈夫志幹の者の道ではあつても万人普通の道ではない。この根本的な問題に立ち向かい、この世親の『浄土論』が説く願生浄土の仏道が、そこに説かれた大乘菩薩道としての内面的な意義を全く見失うことなく、それをそのまま如来の本願力に根拠づけられた仏道大系（救済論）へと展開したのが曇鸞の『浄土論註』である。

つまり、識者の言葉を借りていえば、曇鸞の『浄土論註』によって、この世親の『浄土論』がまことに「浄土論を第十八願開頭の書たることを明かにしたるが論註の積功である」（稲葉円成著『往生論註講要』）といわれる所以である。本研究はこの稲葉円成による「第十八願開頭の書」という提言を受けて、曇鸞は世親の『浄土論』を解釈する中で、いかに達意的に第十八願を根拠にして『浄土論』を解釈したのかを曇鸞の『浄土論註』のいくつかの文言を取り上げながら明らかにしたい。それによって、宗祖親鸞聖人が、「世親菩薩、弥陀の本願を積しあらわしたまえる御ことを、論というなり」（『尊号真像銘文』）とまでいわれた内実を伺いたい。

本論題の考察方法としては最初に曇鸞が世親の『浄土論』を明らかにするために、『大無量寿経』に説かれた第十八願文を引用して、その仏道を見極めようとした箇所をまず確認し、それらの一々の引用において、曇鸞がどのように世親の『浄土論』を解釈したのか。その註釈の根本的な意義を明らかにしたい。更に、その解釈を通して『浄土論註』の至る所に見られる文言の背景に、第十八願（および成就文）を以て解釈していることの意義を確認したい。なお、引用文の『浄土論註』における位置を示す呼称は『真宗聖教全書』によって記すものとする。

(1) 浄土論大綱から

易行道は、謂わく但信仏の因縁を以て浄土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生を得。仏力住持して即ち大乘正定之聚に入る、正定は即ち是阿比跋致なり。譬えば水路に船に乗ずれば則ち楽が如し

（『真宗聖教全書』一 二七九頁）

(2) 八番問答から

答えていわく。王舎城所説の無量寿経を案ずるに、仏阿難に告げたまわく。十方恒河沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを称嘆したもう。

諸有の衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せむこと乃至一念せん、至心廻向したまへり、彼の国に生まれんと願ずれば即ち往生を得不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法を除くと。（以下略）（『真宗聖教全書』一 三〇七頁）

(3) 利行満足章から

然るに要とに其の本を求めると阿弥陀如来を増上縁と為す。他利と利他と談ずるに左右有り。若し自ずから仏をしていわば宜しく利他というべし、自ずから衆生をしていわば宜しく他利というべし。今まさに仏力を談ぜんとす、是の故に利他を以て之をいう。まさに知るべし。此の意なり。凡そ是れ彼の浄土に生ずと及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり。何を以て之をいうとなれば、若し仏力に非ずば四十八願便わち是れ徒設ならむ。今的に三願を取て用いて義の意を証せん。願にのたまわく。設ひ我仏を得んに、十方の衆生、至心信樂して我が国に生まれんと欲うて乃至十念せん。若し生を得ずば、正覺を取らじと。唯五逆と誹謗正法とを除くと。

〔真宗聖教全書1〕三四七頁)

三

以上の三箇所を検討したい。ここにはいずれも、文字通り、第十八願（成就文）が引用されている。先ず、(1) 浄土論大綱の箇所である。ここは一般的にいわゆる文前玄義と称される場所では世親の『浄土論』がいかなる課題を荷負した、いかなる仏道であるかが明らかにされている。曇鸞は『浄土論註』の冒頭に「謹んで龍樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるにいわく」と龍樹を掲げて、世親の『浄土論』を註釈する。これには二つの確かめがある。一つはこの『浄土論』に説かれた願生浄土の仏道が龍樹の大乗菩薩道を課題にする仏道であることの確かめである。二つはその課題を明確にする仏道は龍樹によつて提起された「大人志幹」ではなく「怯弱下劣」のものが歩むことのできる「信方便の易行」であることの確かめである。

龍樹の「信方便の易行」を継承した「易行道」においては、その「信方便」は「信仏の因縁」として、つまり、

徹底的に空しく流転する衆生を掴み取って離さない不虛作住持なる功德としての本願に基づく仏道が提起されているのである。具体的には『大無量寿経』に説かれた一切衆生の救済を課題にする阿弥陀の本願を根拠として曇鸞の易行道積は成り立っている。それが第十八願成就文と第十一願成就文をもって説かれた『浄土論註』冒頭の易行道積である。

惠然の『浄土論註顕深義記』にはこの易行道積が明確に龍樹を受けて「此の註論の意は即ち是れ第十八願の一心称名必然なり、故に本論主の願生の心行は他の因縁無し、唯一心帰命阿弥陀仏に在り。(略)論に信方便と曰い今信仏因縁と云い俱に是れ本願力を信ずるの義なり」(第一卷八丁右)とある。このような先哲の指南に従って曇鸞の易行道積を了解するならば、世親の『浄土論』はなによりも本願力を信ずる仏道である。つまり、一切衆生を我として内に摂取して捨てない阿弥陀の本願を根拠とする仏道であり、そしてそれは阿弥陀の本願を収斂する第十八願をもって成り立つ仏道であることがこの易行道積から確認することができる。

この易行道積に先立つ難行道積の五難の中、全体を総括する第五番目に説かれた「唯これ自力にして他力の持つことなし」と記された「他力持」こそが「不虛作住持功德成就」を現すものであり、それこそが『浄土論註』下巻観察体相章で、曇鸞が「不虛作住持功德成就は盖し是阿弥陀如来の本願力なり」(『真宗聖教全書』三三一頁)と言いつつ阿弥陀如来の本願力そのものであり、その本願力による願生浄土の仏道を易行道積で第十八願願成就文と第十一願成就文によって裏付けるのである。ここにおいて瑜伽行唯識学派の学匠世親の著になる『浄土論』が明確に「他力心行の威徳」を明らかにする「第十八願の開顕書」として見いだされるのである。

四

次に第十八願（成就文）が引用される箇所は『浄土論註』上巻末の、いわゆる八番問答である。それでは八番問答において、第十八願（成就文）がどのような意義を持って引用され受容されているか考察してみたい。曇鸞の『浄土論註』上巻末に展開された八番問答はいわゆる『浄土論』末尾の流通分（回向門）に「我、論を作り偈を説きて、願わくば弥陀仏を見たてまつり、普くもろもろの衆生と共に安楽国に往生せんと」（『真宗聖教全書』二七〇頁）と記されたその「諸衆生」とは「何等の衆生」をさすのか。論主世親がともに往生せんとした共なる衆生とはいかなる衆生かを明らかにするものである。

曇鸞が展開する八番問答には二つの大きな主題が述べられている。一つは『浄土論』の正所被の機（主体）とはいかなる存在かを明らかにすることである。二つはその機（主体）を救済することのできる十念往生の法理（道理）を明らかにすることである。以上の二つが大きな主題である。そして、その二つの問題を明らかにする経典として『大無量寿経』と『観無量寿経』が掲げられている。

もちろん、この二つの経典が掲げられたのは直接的には「諸衆生」を明らかにするためである。そこには周知の通り、『大無量寿経』と『観無量寿経』との所被の機の相違を通して、それが第二問答へと展開されていく。しかし、その問題については、いまは問わない。むしろ、一切衆生の救済を掲げた阿弥陀の本願を説く『大無量寿経』と、その本願がいわば歴史的社会的現実との関わりで説かれる『観無量寿経』をもって、曇鸞が共に往生せんとする「諸衆生」を問題にしたことに注意を払いたい。つまり、曇鸞の『浄土論』解釈の方法論として、曇鸞はどこまでも空理空論ではなく、実理実論を大切にしている。それは現実を捨象しない立場を貫いているということである。

それは浄土の二十九種莊嚴を明らかにする場合においても、「仏本何が故ぞ、此の莊嚴を起こしたまう」（『真宗聖教全書1』二八七頁）と問うて、「有る国土を見そなわずに」と追求する姿勢からも理解することができる。

ところで、世親はこの偈頌（総説分）の末尾で「普く諸もろの衆生と共に」と結んでいるけれども、長行（解義分）の冒頭で、『浄土論』全体の課題である願生浄土の仏道がいかなる方途で衆生の上に明らかになるかということについて、『浄土論』解義分の第二「起観生信」章で「云何が観じ、云何が信心を生ずる。若し善男子・善女人、五念門を修して行成就しぬれば、畢竟じて安樂国土に生じて、彼の阿弥陀仏を見たてまつることを得」（『真宗聖教全書1』二七〇頁）と明らかにしている。そこでは「善男子・善女人」が五念門行の実修主体として掲げてありながらも、回向門を考察する第五「善巧摂化」章においては「是の如く菩薩、奢摩他と毘婆舍那とを広略に修行して柔軟心を成就す、実の如く広略の諸法を知る」（『真宗聖教全書1』二七五頁）とあって、その実修主体が「善男子・善女人」から「菩薩」とかわっている。

その転換は往生浄土行としての五念門の行が高遠難修で、その実修内容が菩薩と呼称される自利利他の課題を歩むものにおいてしかなされない仏道であるからである。しかし、曇鸞において八番問答で明らかにされた論主が共に往生せんとした「諸衆生」とは『大無量寿経』からいえば、「一切外道の凡夫人」であり、『観無量寿経』からいえば、「下品の凡夫」である。もちろん、曇鸞はこの両経の、一方は五逆と誹謗正法を除き、他方は五逆を除かない。この両経の相違をとおして、罪惡の根源を説示しているが、いずれにしろ、罪惡深重の救済が課題になっている。しかし、その意味からすれば、その罪惡深重の衆生が菩薩をもって実修可能な五念門を修することは不可能といわなければならぬ。それは煩惱具足の身を抱えて『浄土論』に説かれた奢摩他・毘婆舍那を中心にした教えに触れれば何人も想起せざるを得ない現実的矛盾ではないだろうか。

三界を尺蠖の循環する如く、蚕繭の自縛する如く流転する衆生が救済される課題が往生浄土であるならば、その

往生浄土は万人普遍の課題である。そのかぎり、その往生浄土の仏道はある特定の能力のあるものの道であってはならない。万人普遍の道でなければならない。その課題に応える仏法が十方衆生が救済されなければ私は正覚を取らないと誓った阿弥陀の本願であり、就中、第十八願であり、それが『大無量寿経』である。更には、その阿弥陀の本願が南無阿弥陀仏として歴史的社会的現実を発動する世界を明らかにする『観無量寿経』である。

その両経をもつて曇鸞は論主世親が「普く諸々の衆生と共に」往生せんとしたその衆生を罪惡深重の衆生と見いだし、しかも、その衆生を救済する法こそが十念念仏であると十念往生を明らかにする。しかも、曇鸞はこの八番問答の冒頭において第十八願成就文だけを引用したのではない。そこでは第十七願成就文と一続きで引用している。それはやがて親鸞聖人によって明確にされた諸仏称名、衆生聞名の法門に先立つものであろう。そういう了解が許されれば、ここに両願を掲げることによって本願文の「乃至十念」が眞実になされ得るのは諸仏の称名であると見定めていく視点が既に曇鸞において暗示させられている。そこまでの意義を持つのが両願と両経を掲げる意義ではなからうか。

その意味では、あらためて先に考察した第十八願成就文と第十一願成就文とによる易行道釈との関係で言えば、八番問答における第十七願成就文と第十八願成就文の両願引用の意義は、「信仏の因縁」をもつてする願生浄土の仏道の内実を明らかにするものである。つまり、易行道釈においては願生浄土の仏道が本願力を信ずる信において成り立ち、その信（因）によって獲得される証（果）の世界を明らかにすることによって、願生浄土の仏道の教理が明らかにし、その巻末においては第十七願成就文と第十八願成就文とを連引することによって、「能彼の法」としての「十念往生」のよつて立つ根拠が、第十七願に象徴される諸仏の称名であることに見いだしている。

そのようなことがどこで知ることができるかと言えば、それはその十念往生の妥当性を証明する三在釈によつて知ることができる。三在釈によれば、十念往生が成り立つ根拠は、それがほかでもない「善知識方便安慰して実相

の法を聞くに依て生ず」(在心)るものであり、また「無上の信心に依止し、阿弥陀如来の方便莊嚴眞実清淨無量の功德の名号に依て生ず」(在縁)ものであり、また「無後心・無間心に依止して生ず」(在決定)ものであるからである。つまり、十念往生が成り立つ根拠はことごとく如来の眞実性にあるのであって、衆生の人間的能力とか資質にあるのではない。この十念往生の教えは人間を根拠とする仏道ではなく、如来の眞実を根拠とする仏道であるからこそ、第十七願成就文が第十八願成就文に重ねて引用されているのであろう。

このような八番問答における本願文を根拠とする解釈と、曇鸞の『浄土論』註釈の妙とでもいえる『浄土論』解義分(長行)に提起された往生浄土行としての五念門を総説分(偈頌)に配当して、「世尊我一心」の一心(信)と五念門(行)との関係を明らかにした五念配釈とを重ねるとき、やがて、親鸞において見いだされる大行論、大信論に先駆ける教学であることが理解できるとともに、この八番問答においても、曇鸞は世親の『浄土論』を徹底して「第十八願(成就文)」を根拠にして読み解いていることがわかる。

五

次に、文字通り、願生浄土の仏道の成立根拠を明確に明らかにする『浄土論註』下巻末の第十「利行満足」章における、いわゆる覈求其本釈、及び三願的証における阿弥陀如来の本願論について考えていきたい。先ず、曇鸞は、第十「利行満足」章において、願生浄土の仏道が成り立つ根拠を問う。つまり、具体的には「何の因縁有てか速得成就阿耨多羅三藐三菩提と言たまうや」(『真宗聖教全書1』三四六頁)と問いを立てて、それに対して、「論に言はく。五門の行を修して自利利他成就するを以ての故に」(『真宗聖教全書1』三四七頁)と答え、更にその成立の根拠を深く尋ねて、いわゆる「覈求其本釈」を展開する。そこに「然るに覈とに其の本を求めるに阿弥陀如来を増

上縁と為す」（『真宗聖教全書1』三四七頁）と述べて、「五門の行を修して自利利他成就」するところの「其」の「修五門行」の根本が阿弥陀如来にあり、その理論的な根拠を「他利利他釈」をもって利他行が仏力であることを確認することを通して、自利利他五念行が全て仏力によることを明らかにしている。

そして、その結論として「凡そ是れ彼の浄土に生ずと及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり」と、願生浄土の仏道の成立根拠が全て「阿弥陀如来の本願力」に存在することを明らかにしている。ここであえて「全て」と記したのは他でもない、この第十利行満足章には「復五種の門有つて漸次に五種の功德を成就すと、まさに知るべし。何者か五門。一つは近門、二つは大会衆門、三つは宅門、四つは屋門、五つは蘭林遊戯地門なり」とあって、この文言は五念門行を因として漸次に（順次に）五功德門の果を得るという五因五果の法門も含めての意味である。

この五念門の行が五功德門の果を成就するという五因五果の法門はいうなれば五念門が大乗菩薩道を成就する仏道であることを証明する論理である。しかし、漸次に成就するという意味では漸次修学の漸教のそれであることが免れない。また同じく利行満足章において述べられている「菩薩是の如く五念門の行を修して自利利他して、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就したまへることを得たまえるが故にと」という、いわゆる、五因一果の法門もやはり、五因五果の法門とともに「漸次修学の漸教であり、断或証理の権教であるばかりでなく、凡夫直入の易行道ではない」という疑問が生じてくることは否めない。

そういう問題を「全て」において克服するのが、この「凡そ是れ彼の浄土に生ずと及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり」の確認である。そしてそれらの仏道、それをここでは願生浄土の仏道といっているのであるが、それらが全て阿弥陀如来の本願力によることが明らかにされて、次のように確認されている。「何を以て之をいふとなれば、若し仏力に非ずば四十八願便ち是れ徒設ならむ。今的しく三願を取て用いて

義の意を証せん」といつて、第十八願、第十一願、第二十二願の三願をもって、願生浄土の仏道が阿弥陀如来を増上縁として成立することを的証するのである。

つまり、この三願的証をもって、『浄土論』解義分の第二「起観生信」章に提起された往生浄土の行としての五念門（いうまでもなく奢摩他・毘婆舍那の止観の行を中心としたものである）が善男子・善女人（曇鸞でいえば一切外道凡人）の上にかに成り立つかという問題に答えるのである。つまり、この「凡そ是れ彼の浄土に生ずと及び彼の菩薩人天の所起の諸行は皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故なり」の確認は先哲において既に指摘されているように、前半の「彼の浄土に生ずと」と後半の「及び彼の菩薩人天の所起の諸行」がともに「阿弥陀如来の本願力」に「縁」と解釈されることによつて、衆生往生の因果が仏力に根拠すること、更には、漸次に菩提を得るといふ文脈で記された五念五功德の問題も、やがて親鸞聖人によつて掲げられた浄土真宗の骨格である往相還相の問題も、皆阿弥陀如来の本願力に縁ることが明らかにされることとなる。

更には、この第十八願、第十一願、第二十二願をもつてする三願的証を通して、先に考察してきた『浄土論註』浄土論大綱（文前玄義）の第十八願成就文と第十一願成就文を根拠とする易行道釈、第十七願成就文と第十八願成就文の連引による八番問答らを重ねて見れば、曇鸞の世親『浄土論』解釈の視座はそのまま、それがやがて親鸞聖人によつて『教行信証』で二回向四法の教相を立てて浄土真宗を明らかにする根源であることがわかる。その意味でも、曇鸞が徹底して世親の『浄土論』の解釈を第十八願文に根拠にして『浄土論註』を著述したことに立つて、あらためて、本願文に立脚した曇鸞の地平から『浄土論』の構造に思いを馳せる時に、親鸞聖人の曇鸞讃歌である「天親菩薩のみことをも／鸞師ときのべたまわずは／他力広大威徳の／心行いかでかさとらまし」に記された「他力広大威徳の心行」が現す『浄土論』における一心（信）と五念（行）の関係と意義について考察して総括にした

六

既に本論考の冒頭に「世親の『浄土論』は確かに「無量寿経」を優婆提舍する論として浄土教仏教の仏道大系を大乘仏教の上で初めて組織的に記述したものではあっても、そこに現された仏道はどうしても瑜伽行を主体的に実践することのできる能力のある特定な丈夫志幹の者の道ではあっても万人普遍の道ではない。この根本的な問題に立ち向かい、この世親の『浄土論』が説く願生浄土の仏道が、そこに説かれた大乘菩薩道としての内面的な意義を全く見失うことなく、それをそのまま如来の本願力に根拠づけられた仏道大系（救済論）へと展開したのが曇鸞の『浄土論註』である」と曇鸞の『浄土論註』の課題とその意義について記述した。

そこでいう「如来の本願力に根拠づけられた仏道大系（救済論）へと展開」した、その「如来の本願力」こそが『大無量寿経』によつて説かれた阿弥陀如来の四十八願であり、その中心である第十八願にはかならない。その第十八願を根底にして世親の『浄土論』に説かれた願生浄土の仏道を明らかにしたのがいうまでもなく曇鸞の『浄土論註』である。そのような本願文を中心とする曇鸞の解釈について、特に易行道釈、八番問答、覈求其本釈を通して確かめてきた。しかし、曇鸞の『浄土論』解釈の根本的な意義は、それらを背景にしてあためて考えるならば、曇鸞は『浄土論』を註釈するに際して第十八願文に表れている「三信十念」を根本にして、この『浄土論』の基本的構造を理解していることである。

いうまでもなく、『浄土論』の題号は『無量寿経優婆提舍願生偈』であり、造論の趣旨は発起序で「我、修多羅真実功德相に依て願偈を説いて総持して仏教と相応せん」（『真宗聖教全書』二六九頁）とあるように、それは三依釈に明らかかなように、どこまでも真実功德の相を説く大乘修多羅を依つて五念門をもって仏教に相応することで

ある。修多羅とは曇鸞の確認においても明らかのように「我も人も共にすくわれていく道」を述べる大乘の修多羅であり、題号にも現れている「無量寿経」に他ならない。

曇鸞は『浄土論』所依の「無量寿経」を「浄土の三部経」を指すものだと見なして、この『浄土論』を周知のように「三経通申の論」としている。そうであるのなら、この『浄土論』の偈頌（総説分）に「世尊我一心」と一心帰命の信心を述べ、長行（解義分）に往生浄土行として五念門の行を説き、しかも、その五念門の因によって五功徳門の果を開いて、浄土教仏教が仏教の根本的課題である成仏を成就する仏道であること、つまり、往生即成仏の法理を明確にしている、その根拠は「無量寿経」（浄土三部経）にあるはずである。

その根拠となる教説こそが世親の『浄土論』に説かれた願生浄土の仏道の成立根拠としての第十八願（成就文）である。それが具体的には『浄土論註』文前玄義の易行道釈であり、上巻末の八番問答であり、下巻末の覈求其本釈である。それぞれの解釈には第十八願を中心にして、願生浄土の仏道体系が明らかにされている。しかも、その仏道を説く『浄土論』の根幹が、その第十八願に説かれた三信十念において構成されていることを見いだしたのが曇鸞その人である。

その事例としていくつかの解釈をあげることができるが、いまは本論文によって取り上げた三箇所の註釈に限ってみていくならば、易行道釈と八番問答において、一方では「信仏因縁便得往生」といい、他方では第十七願と第十八願を連引して「聞其名号信心欢喜」として「信仏因縁便得往生」に対応して往生の信心を語り、『観無量寿経』によって十念往生を述べ、三信と十念との関係を暗示的に指し示して、下巻末の覈求其本釈においては第十八願を明確に掲げて「十念念仏便得往生」と述べている。

こういう曇鸞の解釈は本願文の三信十念をして『浄土論』の根本構造としての一心（信）と五念門（行）に相当させていることは明らかである。また曇鸞は『浄土論註』上巻において、この一心と五念との関係について五念配

釈を施設して、一心から開かれる偈頌に五念門の意義を見いだして、五念門が一心帰命の信心から等流相続する行であると解釈している。更には、『浄土論註』下巻の起観生信章において、往生浄土の行としての五念門の行を総括するかのように、その讚嘆門を解釈して、その称名行が称名行として如実修行し名義相応することを成り立たしめる原点が「論主建に我一心とのたまえり」（『真宗聖教全書1』三三四頁）と述べて、五念門の行が一心帰命の信心から展開されることを明確にする。その信心こそが本願文における三信であり、それが龍樹における「信方便」の信であり、世親における「世尊我一心」の一心であり、曇鸞の信仏因縁である。

このようにして曇鸞は瑜伽唯識仏教の行道である五念門を阿弥陀如来の本願力に基づく仏道として明らかにしたのである。その意味では、曇鸞が掲げる十念念仏もまた五念門がそうであるように本願に基づく一心（信）の等流相続する行であって人間的努力の所産でないことはいうまでもない。それは既に八番問答における三在釈で確認してきた通りである。この曇鸞の解釈こそがやがて法然、そして親鸞において明確にされていた「称名念仏は是れ彼の仏の本願の行なり」（『選択集』）であるとか、「是れ凡聖自力の行にあらず。故に不回向の行と名づけるなり」（『教行信証』）と名のられてきた他力念仏の根源といえる。

本論文において曇鸞が『浄土論』全体を解釈するに際して、必ず第十八願を含みながら各所において、願生浄土の仏道の内実を明確にしていることを確認してきたのは、『浄土論』における第十八願の意義を明らかにするとともに、そこにあらわされている三信十念を根本にして『浄土論』の根本構造もまた成り立っていることを明らかにするためである。そしてその一心と五念こそが「他力広大威徳の心行」として名実共に表現されるためには親鸞の回向の教学においていよいよ開花されることとなることは周知の事実である。